

名前	テーマ	今回の気づき	意見・感想など
川端渉		<p>清宮陵一さんの冒頭の問いが印象的だった。きちんとした場所の広さで演奏練習を複数にやっていると会話せずにもくもく練習する。人と人に割り込むものがなくなる。この割り込みは自分自身にとって、「遊び」という間だ。自分自身も仕事で近くにいる電話で会話する光景が面白くなく、糸電話を用いている事を話したが、何でもない糸電話から脱線した会話が始まり、何でもない実験が始まる。糸ではなく、鉄製のものに変ったら、どういう音になるかなど。普段は仕事で関係ない人とも会話が始まる。「遊び」というなんでもないものが持つ、魔力を感じる。色んなアーティストが上手くいくか解らんが、実験したり作り続けるのは、こういった間を作り続けて磨いているのかもしれない。</p>	<p>いろんな方の話しを聞いて考察するスタイルも良いが、今回の様なアイスブレイクも他の参加者が考えている事が解り、自分自身にもプラスになるイメージが湧いた。</p>
高田和音	「音」をとらえる	<p>スタディとしては、「音楽×○○」で音楽のフィールドを広げていく。自分はその机の上に広がったたくさんの音楽のかたちから自分が飲み込めるものを「砂金集め」のように拾い集めていく。このように自分がスタディをとらえていたことが分かった。</p> <p>今年に入ってから、チェキで毎日一枚とって「チェキ日記」を付けているが、撮るのは「心が動いた瞬間」。そのようなときを写真に収めるときにいつも思うのが、「この瞬間の音も取れたらいいのに」。その瞬間、その空間に流れている音も残しておくことができれば、もっとその瞬間について鮮明に記録できるのではないかと思った。映像ではなく、写真として、それを収めるのって結構面白いと思う。</p> <p>このスタディの少し前に行ったライブについてお話できたのが楽しかった。</p> <p>野村誠さんについて知ることができたのは、すごくよかった。</p> <p>「音」による場づくりにすごく興味があって、それをもっと深く考えるきっかけになった。その場その場で様々なもので音を奏でていく、楽器の経験の有無にかかわらず、音を楽しむ。しかも、それを奏でているのは自分一人ではなく、たくさんの人がいて、それがアンサンブルになる。とっても面白いことだと思った。</p>	<p>今回のような、スタディの皆さんでいろいろお話できる機会がまたあったらうれしいです。みなさんが「音楽」や「音」をどうとらえているのか聞けるのはそれぞれのバックボーンが違って、自分にない視点をくれるのでとても楽しいです。次回も楽しみです。</p>
宮内俊樹 (名小路浩志郎)	時勢を読むセンスと、音楽を「自由」にすること	<p>今回はメンバーとの中間振り返りだった。「公共における音楽」というテーマでこれまで見聞したことを改めて整理するのはとてもいい機会になった。その現在形として例示された野村誠さんはとても独特の立ち位置である。不勉強ながら、彼のことは知らなかったし、京都に3年いても、音楽ライター仲間からもその名前を聞くことがなかったのは不思議としか言いようがない。ジャンルをクロスボーダーして思考していく必要性を感じさせる。</p> <p>2つ気づきがある。ライブ表現を中心に考える音楽が、「公共における音楽」のあり方を拡張させていること。ライブだけでなくワークショップや講演、アート制作との結びついていくし、副業でも専業でもパラレルキャリアでもYoutuberでも、なんでもいいのだ。パッケージソフト主体で考える必要はなくなったとまとめてもいい。</p> <p>もうひとつは、それがビジネスや生業として成り立つのかどうかはまた別の話というかこれから形づくられていく話ということ。もしかしたら演者の熱量と参加者の共感に対する「おひねり」「お布施」によって成立するビジネスになるのかもしれないし、とんでもない単価がつく市場になるのかもしれない。</p>	